〔生化学　第72巻　第7号，p. 503，2000〕

アトモスフィア

unityとdiversityと

菊地　吾郎
本会名誉会員

このコラムの趣旨は，昔の人に現代の生化学について何かを語らせる，ということのようである．私は終戦直後に日本医科大学生化学教室で研究生活をはじめ，1983年には東北大学医学部を定年退職しているので，「昔の人」であることは間違いないが，果して現代の生化学について何かを語ることができるのかどうか．そこで，いわば一人の傍観者として，昔に比べて今はどうか，あるいはその逆はどうだろう，という風に考えてみることにする．

終戦後間もない1940～50年代には，*J. Biochem.* の編集はほぼ全面的に東大医・生化学教室に依存していた．私が1951年にはじめて論文を *J. Biochem.* に投稿した時，しばらくして東大生化学の児玉桂三教授から呼び出しの電話をうけた．そして，児玉先生は教授室で貴重な時間を割いて，駆け出しの私の論文の細部にわたって英文校訂をして下さった．牧歌的な時代があったのである．

その頃に比べるのは時代錯誤というものだが，現在の *J. Biochem.* の充実度は素晴らしい．カバーする分野や審査過程を含めて編集の緻密さは間然するところがない．つまり，私としては当面，何も言うことがない．

最近の生化学会大会についてもほぼ同様の印象である．今年の初め頃，第73回大会について中西重忠会頭から「ご案内」をいただいたが，それによると，ゲノムの情報が明らかにされていく中で，生体情報の産物である生体物質の機能と作用機構を明らかにするのが生化学，という明確な認識を掲げて，その上で，新しい視点と方向性を模索して行きたい，と述べられている．現段階での生化学の状況が適確に捉えられていて，感銘した次第であった．他方，実際問題として，数十に分れた会場での同時進行という現実の場面では，その本来の効果を実現するのは容易なことではないだろうとも思う．

遠い昔の話になるが，私が生化学会にデビューしたのは1949年，京大の内野仙治教授が会頭で開催された総会（当時はそう呼ばれていた）であったが，会場は京大医学部講堂一つだけであり，それで，発表者は学会参加者のほぼ全員にその場でアッピールできた．童話みたいなことで，これがよいというのではないが，そこで味わった充実感や人間的交流の有難さを私は忘れない．

近年，大会のマンモス化に伴って失われたものもないではないが，例えば個々のシンポジウムの場面では，同学の前に立った若い研究者の中には，かつての私と同じような経験をしている人もあるのではないだろうか．初心を大切にしたいものである．

ところで去る4月の初めに，思いがけないことにある特定領域研究（A）の総括班長から，4年間の研究総括特集号をお送りいただいた．私が現役時代に経験していたいわゆる総合研究とは大違いで，高額の科研費に支えられたその組織の大きさと緻密さ，また研究活動の多彩さに一驚した．

班長はその総括の結びの中で，その分野でのこれまでの「細分化し，深く入って行く方向」の切り口を変え，新しい見方で体系を作りなおす方向に向けて，更なる発展を期待したい旨を語っていた．これにも私は，深く同感した．今日の個々の専門分野で，それぞれの主題の深化と統合が同時に追究されるべき時期，つまりunityとdiversityの双方が考慮されるべき成熟した時期に来ている，ということであろう．

しかし，上のような現在の大状況とは別に，生命科学としての生化学は，元々unityとdiversityの双方を見つめるべき構造になっているのではないか．実は私は昔の米国研究留学中に，ある種の比較生化学に出会った経験からそのような考え方を刻印されたように思っているが，この考えは，他方では生化学の個々の研究者に主体的な余裕を与えてくれる効用があるかもしれない．

情報過多の現在では，研究者は価値の多様性に信頼して，世界が一つになってはつまらない，と居直ることも必要なのではあるまいか．